

着任のごあいさつ

林産試験場長 八坂通泰

4月1日付け人事異動により林産試験場長という大役を任せて頂き、大変、身の引き締まる思いです。最近ではマネジメント役で研究現場からは離れていますが、20年以上は研究職として美唄の林業試験場や、函館の林業試験場道南支場で勤めてきました。まず、私の林業試験場での仕事について少し紹介させていただきます。

私が入庁した1990年代始めは、北海道では森林伐採量は現在よりも多い年間600万㎡以上あり天然林への依存度が高く、本格的な天然林施業が行われた最後の時代だったと思います。道南地域では天然林の主体はブナ林で、ブナの更新は必ずしも成功率が高くなかったため、初めに手掛けた仕事はブナの天然更新施業の高度化でした。ブナの仕事はある程度成果をあげることができましたが、その後、天然林の伐採は資源の枯渇や環境問題への関心の高まりから減少し、2000年ごろは北海道の森林伐採量は年間400万㎡を下回り、林業が最も低迷する時期を迎えました。



そのとき、林業試験場では、研究の方向を林業から環境へ大きく舵を切りました。温暖化や生物多様性などの環境研究や、街路樹や公園など身近な緑の研究が増え、組織的にも緑化樹を研究する部署ができ、私自身も緑化樹の研究部署に配属されました。緑化樹については、研究の方向性に悩みながらも、時代を追いかけるように、ハマナスの品種開発、シラカバ花粉症、絶滅の恐れのある樹木の保全などいろいろな仕事をやらせてもらいました。

その後、人工林資源の充実とともに2009年には森林・林業再生プランが策定され、私自身も緑化樹から林業経営を研究する部署に異動し、カラマツ林業の低コスト化、収穫予測システムの開発、持続可能な人工林の資源管理などを手掛けるようになりました。このころ森林施業と材質との関係などについて林産試験場と本格的に共同研究を始めています。そして今回林産試験場に異動になったことは、林業・木材産業の成長産業化を推進する上で、川上川下が一体となって取り組むことが不可欠な時代だと改めて実感することになり、非常に感慨深いものがあります。

振り返ると、自分の判断や人事異動によって研究の方向性を変えてきたという思いがありましたが、やはり大きな時代の流れに強く影響を受けてきたと改めて思います。おそらく今後も時代の要請は思ったより早く変化していくものと予想されます。

変化する時代の要請に、我々研究機関が適応するためには、私の限られた経験では、地道に時間をかけて行う基盤的な仕事と、時代の要請に適応が必要な仕事を、うまくミックスさせていくことが不可欠だと思います。私の場合も、いろいろな分野でそれなりに仕事のできたのも、各分野での土台となる基盤的研究がそれぞれの部署で持続されていたためです。組織における人事は、組織の活性化という役割があると一般的にはいわれますが、基盤的な仕事の継続と、新たな時代の要請への対応を両立させることも人事の1つの役割になるはずです。

一方、林業・木材産業の成長産業化や森林資源の循環利用、究極的には持続可能な森林経営という目標は引き続き掲げられるでしょう。これらを実現するためには、これまでと同じ活動を繰り返すだけでは困難です。何を持続し、何を変えなければならないのか？そして、どんな森林、林業、木材産業ひいては木の文化を次世代に受け継いでいくのか？本州とは異なる気候風土、植生、社会産業構造を持つ北海道で、人工林が利用期を迎え、天然林への期待も少しずつ高まっている今こそ研究機関、業界、行政だけでなく、市民を巻き込んだ議論が必要なはずです。こうした議論を通じて北海道独特の木の文化を深化させることは、木材産業の地域ブランド力の強化にもつながるでしょう。

少し勝手なことも書きましたが、私自身は木材関連産業については勉強することばかりです。皆様のお力を得ながら、林産試験場が、さらに北海道の林業・木材産業に少しでも貢献できればと考えていますので、これまでどおり林産試験場をよろしく願いいたします。